「茶旅」
“こぼればなし”

(45)

九州茶の恩人 可徳乾三について (2)

コラムニスト　須賀　努

前回に続いて可徳乾三の後半生を簡単にまとめてみた。1900年に九州に戻った可徳は、茶の輸出に尽力するとともに、自らも紅茶や磚茶の製造を行い、シベリアでの商売を広げていたという。だがその時期は数年前に日清戦争があり、その後の三国干渉、ロシアの中国東北部への進出など、政治・外交的には極めて難しい局面であった。可徳はこの時勢を一体どのように読み、貿易を展開したのであろうか。

可徳はウラジオストックの出張所の他、ハバロフスクには独力で可徳商店を開き、阿倍野利恭を支配人として置き、語学や貿易の実務研修のために渡航していた4名の青年に店の運営を任せ、紅茶や磚茶の輸出を行っていた。この可徳商店で働いていた若者は皆、可徳の親戚であった工藤左一らが郷里で設立した合志義塾出身者であり、可徳は単なる商人ではなく、人を育てることに重きを置いた指導者であったとも言われている。

可徳自身は九州のため日本のために茶葉を売るだけの目的でシベリアに進出していたと思われ、政治的、外交的な意図はなかっただろうが、阿倍野利恭には対口諜報活動という茶業以外の目的があったと言われている。日露戦争前夜のシベリアで茶が絡んだ熾烈な歴史が展開されていたとすれば、それはそれで実に興味深い。

因みに阿倍野は日露戦争に従軍し、その後熊本に戻り、熊本県茶業組合長や九州磚茶株式会社を創業、可徳と共に紅茶や磚茶の輸出再興を計ったが、残念ながら失敗に終わったらしい。彼は単に可徳を利用して諜報活動を行っていた訳ではなく、九州の茶業にも尽力していたことはこの点からも窺われる。

可徳にとって不幸だったのは、その日露が戦闘状態に入ったこと。当然ながら商売は停滞してしまう。戦後に再起を図るために、ロシア、モンゴル、中国を駆け巡るも機を逸しており、またもや資産を失ってしまう。そんな可徳が最後に辿り着いた先が台湾。なぜ彼は台湾に渡ったのだろうか。その記録は見付かっていないが、個人的には台湾の茶業試験場を立ち上げた初代場長、藤江勝太郎との関係ではないかと、勝手に睨んでいる。

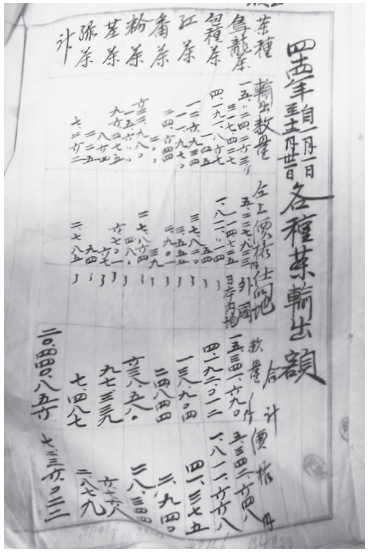
藤江は静岡の出身で、日本統治の始まった台湾で当初から茶業に専念してきた人物。一見可徳とは接点がないように見えるが、実は両人は1887年の同じ時期に中国漢口に製茶修行に向かっている。この時代、日本人が同じ海外に同じ目的で行けば、何らかの接点があっただろうことは想像に難くない。更に言えば、両者とも若い頃は横浜にも出入りしており、また可徳は静岡の紅茶伝習所で教えたこともあるので、その時知り合っていたのかもしれない。

いずれにしても藤江の開いた台湾の試験場はちょうど製茶が軌道に乗り、1910年、商業生産は日本台湾茶株式会社に委託されることになる。その実施的な責任者に藤江が就任（取締役）、その主力商品は可徳も漢口で習得した紅磚茶（紅茶の粉末をブロック型に固めたもの）であり、紅茶作りの得意な可徳を藤江が誘ったのではないかと考えている。

因みに1906年に試験場で作られた茶が初めて輸出されたとの記録があるが、それはロシア向けの紅磚茶であった。これも全くの想像だが、この茶の輸出には可徳の販売ルートが使われたのではないかとさえ思ってしまう。ただ1906年と言えば日露戦争の翌年に当たり、果たしてこの時の日露の貿易関係がどのようになっていたのかは定かではない。

台湾時代の可徳に関する資料はあまり残ってはいない。ただ日本台湾茶株式会社に入社した可徳について、同時期に同社で働いており、後に台湾中部魚池に茶園を開き、紅茶製造を試みた渡辺伝右衛門は以下のように書き残している。『社内の最年長、そして紅茶製造の第一人者であった可徳乾三氏は台湾紅茶製造の新境地を切り開いた。その萎凋・発酵方法は中国式製法を援用しているが、可徳氏の製法は独特で、海外市場での売値は平均より高かった。茶葉は台湾北部の在来種を使って紅茶を作っていた』という。

可徳は同社で6年間勤務後、退職して安平駅（現在の埔心駅）前に梅花園という茶荘を開いた。自ら紅茶を作り、その品質は日本内地にまで評判になっていたらしい。一方で1922年に茶商公会が全台湾規模で実施した製茶品評会では、再製烏龍茶という部門で二等賞を獲得している。九州、シベリア、台湾と渡り歩く、こんなダイナミックな人生を送った茶業者が明治期にいたことは実に驚きであり、もっと世に知られるべきだと思う。（すが　つとむ）



写真：台湾茶輸出係数（1911年）にみられる紅茶